シュライエルマッハー研究の再興

水谷 誠

近代ドイツのプロテスタント神学者シュライエルマッハー（F.D.E. Schleiermacher, 1768-1834）が青年期に、カント（Immanuel Kant, 1724-1804）の哲学と格闘したことはよく知られている。このシュライエルマッハーの生涯の前半期を浩瀚な伝記に著したW・ディルタイは、詳細にまた美しく青年シュライエルマッハーとカントとの関係を解説し、論じた（Leben Schleiermachers, 1870）。このディルタイの描写は、ディルタイ自身のカント解釈（後年にディルタイはアカデミー版のカント全集の編集者として活動した）をシュライエルマッハーにあてはめる傾向があるという点で批判すべきところがあるものの、多くの示唆をわれわれに与えている。そこで、これに従って問題点をさぐってみよう。

シュライエルマッハーは、いったいどのような仕方でカントを受容し、また批判したのだろうか。彼はカントとは異なる自らの立場、原理を対置、主張してカントに立ち向かったのではない。原則的にシュライエルマッハーはカント自身の思考と論理の世界に身を置いていた。カントの理論哲学は、彼にとって、それ以降の思索の基礎になるものと思われた。しかしそれと同時に、カントの実践哲学については承服しがたいところがあった。シュライエルマッハーによれば、理論哲学で展開した批判的方法は、理論的部門と実践的部門の両者の形式的整合性をカントが重んじたあまり、実践哲学では充分に貫徹されていない。その結果、両者の間に潜むことになった齟齬を理論哲学の批判原理に従って明らかにしようとしたのであった。ディルタイがカントの『実践理性批判』に批判を加えたシュライエルマッハーの論文（『最高善について』一七八九年）を前にして、原理上違う立場に立って外在的にカントを批判、吟味したのではなく、カントの立論の前提を承認した上で、この前提から内在的批判を遂行したと評価したのももっともである。

このところ、この「内在的批判」ということにしきりに心を動かされている。カントに取り組んだシュライエ

ルマッハーのこの批判の仕方に――もちろんそれはとりたてて目新しい方法ではないが――、日本における神学的営みを振り返り、反省する際のひとつの可能性を思う。周知のように、われわれの国の神学は、欧米のキリスト教の遺産に学ぶところから出発した。それは現在も変わるわけではなく、多くのキリスト教の古典、神学的著作、啓蒙書が邦訳され、われわれの親しく目を通すことのできるものとなっている。毎月の新刊案内には、常にキリスト教関係の書物の翻訳が紹介され、われわれの精神的糧となり、また刺激を与えている。おそらく今後もこの事情に変りはないであろう。この点では、精神文化の他の領域と同じく、明らかに日本は輸入超過である。そしてそれらの大部分は、ある時間が過ぎるといつの間にか熱が冷めていくような仕方で忘れられていく。その著作、神学思想の生まれた場所で社会情勢に変化が現われ、関心が新たな課題に移り行くに伴い、われわれの国においても新しいものに目が移り、それが紹介されてゆく。

もちろんそれは単に批判すべきことではない。自前のものを持たない翻訳文化だと皮肉られるだけのものではない。伝統的に日本の文化はそのような仕方で、渡来した種々の精神材を吸収し、自家薬籠中の物としてきた。キリスト教と神学がその例外ではありえぬだけである。しかも今までのもので充分ということはなく、今後に紹介が必要なものも枚挙にいとまがない。常にそれらに接して刺激を受けることで、われわれのキリスト教的、神学的な思索の営みもその健康を維持することができると言ってよい。さらにまた、現代は国際交流が日常のものとなり、瞬く間に海を隔てた遠くの国の出来事が自らの出来事となる時代である。真っ先に課題を抱えこんだ場所で取り組まれた結果生まれた神学的成果を吸収し、それに学び、そして自らを点検していく作業は、世界的視野をわれわれの営みが保持するためにも欠かすことはできない。かの国にとって重要なことは、たいていわれわれの国においても同じ事情だからである。激しく動くこの時代にあっては、この目移りの速さもやむを得ないところである。こういう仕方で、世界に起こっている緊要な問題とその解決の試みを認識し、それをわれわれの国の問題とする中で現代を見据えていくことができるとも言える。

しかし他面、近代日本のキリスト教受容と共に始まったわれわれの神学的、思想的営みもまた、既に見逃すことのできない量と質を有するにいたっている。もし学ぶということが、歴史の遺産を見直すこと、それを再読し、再々読することであり、その作業を通して新しい知の枠

組み、体系が創出されていくのだとするならば、それはわれわれの眼前にある先人たちの遺産に対しても妥当する事柄である。この国自身に現われた成果を抜きにして、欧米の新しいもののみを学ぶべき対象とすることはできない。このような日本における神学的遺産に属するものとして、第一に、日本のクリスチャン自らの活動の中から生まれた神学的、思想的成果を、第二に翻訳と紹介によって導入された欧米のすぐれたキリスト教思想をあげておきたい。

まず、日本のクリスチャンによる特色あるすぐれた著述は、すでにプロテスタント第一世代に始まっていた。そして、それ以来学問的研究の深まる中で多彩な業績が現われ続けている。ただしそれらの著述は必ずしも古典として、教科書として評価の定まったもののみに限られるべきではない。近代化のプロセスにおいて、その時代の精神を一身に引き受け、またその限界の中で日本の神学は営まれてきた。それは多くの点で評価すべき質を備えていると同時に、その時代と社会の持つ困難をも背負っているのである。それは言わばわれわれ自身の営みを写し出す鏡である。そこに現われた志向や論理を十分に考慮しつつ、同時に批判的に分析し評価しなおすことは、日本における神学的営為の問題と限界、また課題と可能性を自覚的に明らかにしていく道だと言えるだろう。

このことに加えて、日本に紹介された欧米の神学思想の研究をさらに発展させる必要がある。遺産とは、日本のキリスト教思想家や神学者たち自身の業績だけではない。われわれの思索を刺激し、それをさらに促す役割を果たした欧米の教師たちの思想もまたこれに含めることができる。不充分な理解は時に自己主張の道具にのみなりさがる危険をはらんでいる。東北学院大学の大崎節郎教授は、日本の神学に強い影響を与えたバルトに言及して、「この国におけるバルト神学の学的な研究は、ようやく緒についたばかりである」(『恩寵と類比』一九九二年)と語っておられる。バルトよりも紹介の時期も早く、また関心の拡がり(神学のみならず、宗教哲学、教育学、文学)を見せていたにもかかわらず、誤解を含む無理解の中に長く放置されたシュライエルマッハーについての研究も同じ状況にある。最近、とりわけ神学関係のシュライエルマッハー研究が成果をあげていることは喜ばしいことであるが、彼らについての研究をさらに深化させることを通して得られることは、数多いのである。

ところで、私自身は断続的にではあるが、シュライエルマッハー、とりわけその初期の思想形成に関心を向けてきた。一九六六年と一九八五年の二回に分けて、アメ

リカのタイスはシュライエルマッハー文献目録(T.N. Tice, Schleiermacher Bibliography, Princeton)を出したが、それによれば、一八三四年の彼の死後今日にいたるまで切れ目なくシュライエルマッハー研究は続き、一九八四年までに神学、哲学関係の文献は二三一一点に達している。その中でとりわけ数の多いのは一九六五〜一九八四年の六六六点であり、この活発な状況は今も変りがない。現在のシュライエルマッハー研究は、今世紀前半の弁証法神学による批判にさらされた時期を過ぎて、再興といっても過言ではない状況にある。この事態は、ドイツ・イデアリスムスの時代への関心が復活したことに伴って、一九八〇年より刊行が開始され始めたシュライエルマッハーの新版全集(既に一〇冊刊行)によって加速された。この全集によって今まで未発掘であった資料、手稿でしか見ることのできなかったもの、絶版で入手困難であったもの、そもそも十九世紀の旧版全集に収録されていなかったものなどが手元で処理可能となった。従来のシュライエルマッハー研究では、それぞれの時代、また研究者の価値判断を反映する解釈が種々なされてきた。とりわけ初期の著作は一次資料が充分に整っていなかったために、彼を支持する側と批判する側の双方にあてはまることだが、資料分析によって確認できた事柄を研究者自身の想像で補う傾向が強かった(これは、いずれにしても「事柄に即する」という原則に背を向ける危険を含んでいる)。これらを踏まえて、現在の研究はきわめて詳細緻密な文献の分析を基にして、キリスト教思想、神学体系の解明に向かっている。先程述べたように先人に繰り返し学ぶところに知の営みがあるとすれば、シュライエルマッハーの研究史はそのことをも示しているのである。いずれにしても、眼前の課題の大きさと自らの非力を思わずにはいられないが、日本において創り出され、また紹介されてわれわれを導いたものを正負両面にわたって評価し、再認識する作業の必要性を思う次第である。

(みずたに・まこと　同志社大学神学部専任講師)